

川崎のはじまり、宿場から工業都市へ



横浜（現桜木町）～新橋間を結んだ京浜間鉄道の六郷付近の様子（川崎市立中原図書館所蔵）



絵師の初代広重が東海道五十三次の旅の道中に描いた川崎の風景（川崎市立中原図書館所蔵）

宿場町 川崎 - 川崎宿を支える農民の苦しさ

徳川家康が江戸に幕府を開き、江戸の日本橋から京都の三条大橋をつなぐ東海道を整備しました。川崎宿は東海道五十三次の二番目の宿場町として、1623年に六郷の渡し（今の川崎区旭町六郷橋あたり）に作られました。当時、川崎宿の収入は少なく、宿場を支えるため、農民の生活は苦しいものだったと言われています。



「東海道六郷渡風景」（川崎市立中原図書館所蔵）

コラム 「命の水」二ヶ領用水

二ヶ領用水は、日本でも有数の古い農業用水です。江戸時代の稲毛領と川崎領の二つの領地にまたがって造られたことから「二ヶ領」の名前がつけました。多摩川は昔から平地よりも低いところを流れていたため、どこを掘ったら水を流すことができるか分かりにくく、工事には14年もの年月がかかり、1611年に完成しました。二ヶ領用水の完成により、田畑が潤い、領地の農業の基盤になりました。



工事は大変だったけど、二ヶ領用水がみんなの暮らしの支えになったんだね。

ツツジちゃん



自然の恵みを活かして - あの特産物もこの頃つくられた

江戸時代のなかばころから、農民たちは生活のために、農業(お米)以外の様々な仕事も行い、それによりたくさんの特産物が生まれました。

「食卓塩」は公益財団法人塩事業センターから製造委託を受けた日本食塩製造株式会社(川崎区)が製造しています。



塩づくり



海水を煮詰めている小屋や海水を運ぶ人が描かれている
〔江戸名所図会〕国会図書館蔵

地名に残る塩づくりの歴史

川崎区「塩浜」は、地名のとおり、昔は塩を作るための塩田があり、塩づくりが盛んな地域でした。
このあたりの塩田は 1669 ～ 1671 年の江戸幕府 4 代目将軍徳川家綱の時代に開発されたとされていますが、塩田は 1910 年になくなりました。現在は川崎区に塩の製造を営む会社があります。



海苔の養殖



大師海苔の収穫 (川崎港管理センター)



海苔の天日干し (川崎港管理センター)

海苔づくりを今に伝える

川崎の海では、明治時代から 100 年ほど我が国有数の品質を誇る海苔づくりが行われていました。
現在では、東扇島の川崎マリエン内に、海苔養殖に関する伝統道具などを展示した資料室があります。



梨の栽培



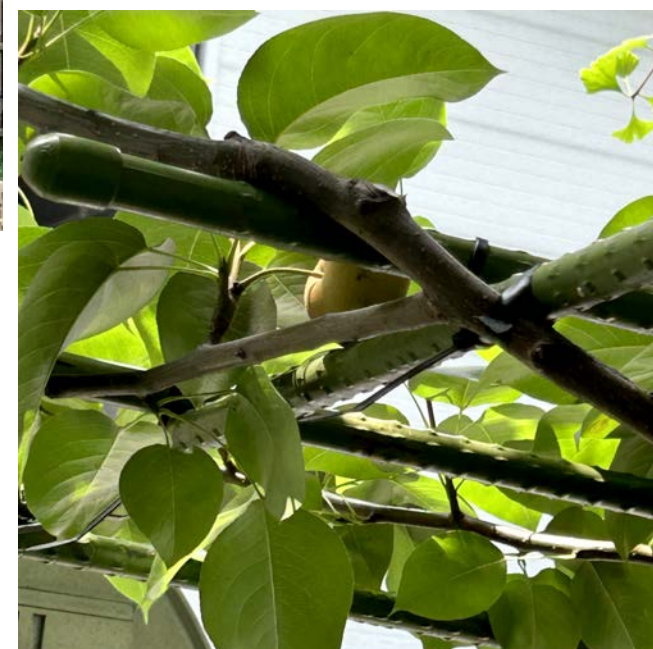
手前の男性二人 (弥次・喜多) が口にあるのは川崎名産の梨
〔書画五拾三景 武蔵川崎〕川崎市立中原図書館蔵

病気に強くおいしい梨づくり

明治時代、大師河原村で生まれた「長十郎なし」は、梨の病気が広がった時も少しも病気にかからなかったのでよく売れ、たちまち全国に広がりました。
工業化に伴い、大師からは姿を消しましたが、2005 年に市民団体による「長十郎の里帰り」イベントで川崎大師駅前に苗木の植樹が行われ、大切に育てられています。



植樹された長十郎なしの苗木



現在の長十郎なし

コラム

「おむすび」のあのカタチ、じつは川崎発祥!?

江戸時代、徳川吉宗一行が川崎宿に宿泊した際、川崎宿の主である田中休愚が、吉宗一行の食事を用意するため、白米のご飯をおむすびにして行列の人々に振る舞いました。その際に、三角形に握り、丸い盆に 3 つずつ並べて、これを徳川家の家紋に見立てたことから「御紋むすび」と呼ばれ、以後 300 年にわたり川崎宿の名物となりました。このことから川崎宿が三角おむすびの発祥の地と言われています。



おむすびが三角形なのは
私たちの住んでいる
川崎がはじまりだったんだね。

ツバキくん

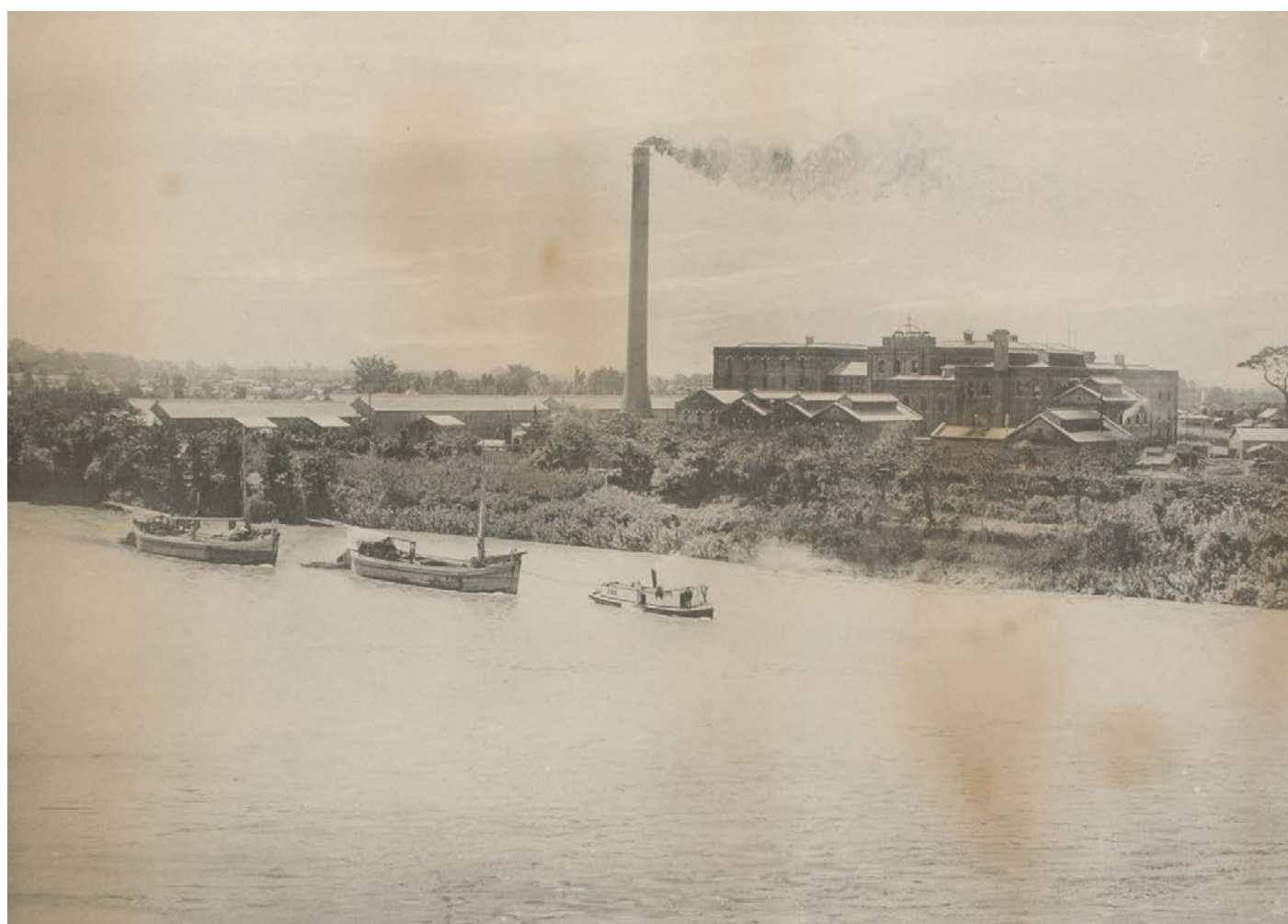


宿場町から新しい時代へ - 鉄道と電気がやってくる

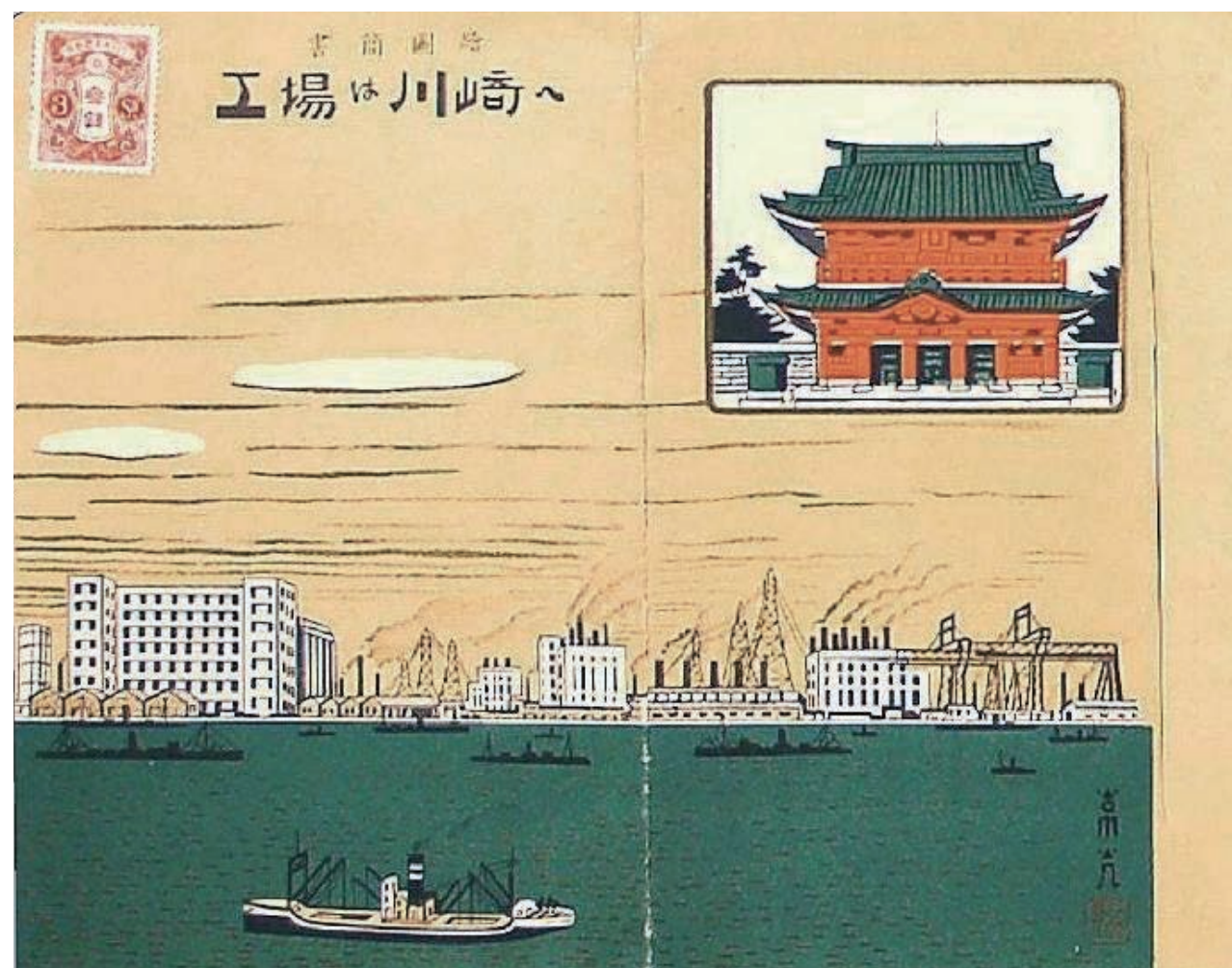
1872年、新橋と横浜のあいだに初めて鉄道が開通し、日本で3番目の鉄道駅として、田んぼの中に「川崎駅」ができました。その後、東日本初の“電車”として、1899年川崎と川崎大師をつなぐために電気鉄道（今の京浜急行大師線）が営業を始めました。

ー工場を作るなら川崎へー

当時の町長（石井泰助）の積極的な働きかけで大きな工場もつくられ、川崎は工場のまちへと様子を変えていきました。



「横浜精糖」(川崎市立中原図書館所蔵)



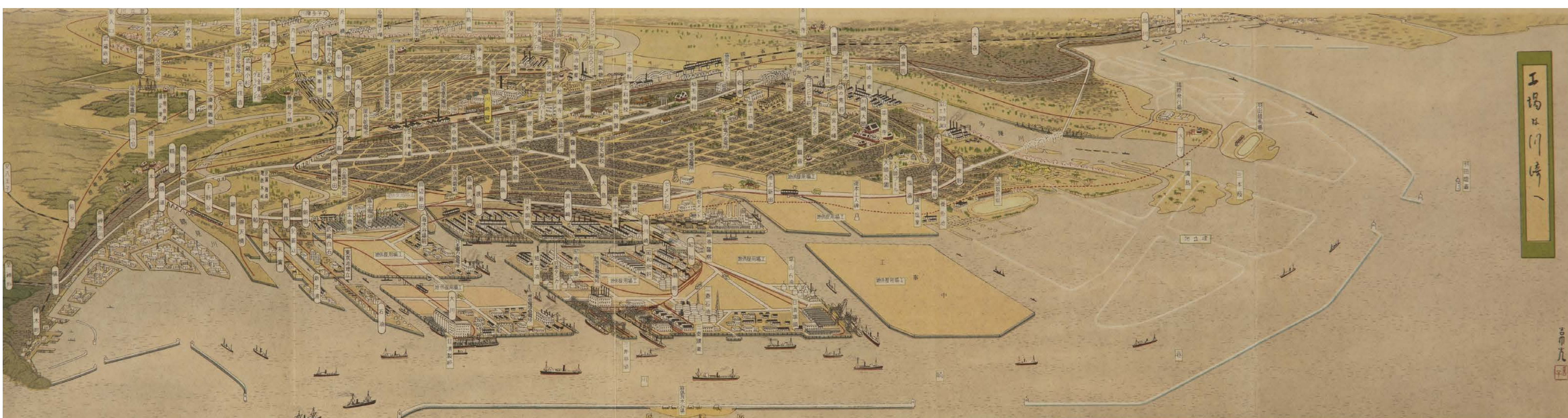
「工場は川崎へ」表紙

鉄道が開通

鉄道の開通は工場が川崎につくられるもとになりました。鉄道に電気を送る火力発電所の電力と多摩川の水に目をつけた会社が次々に工場の建設を始め、近代化が進みました。



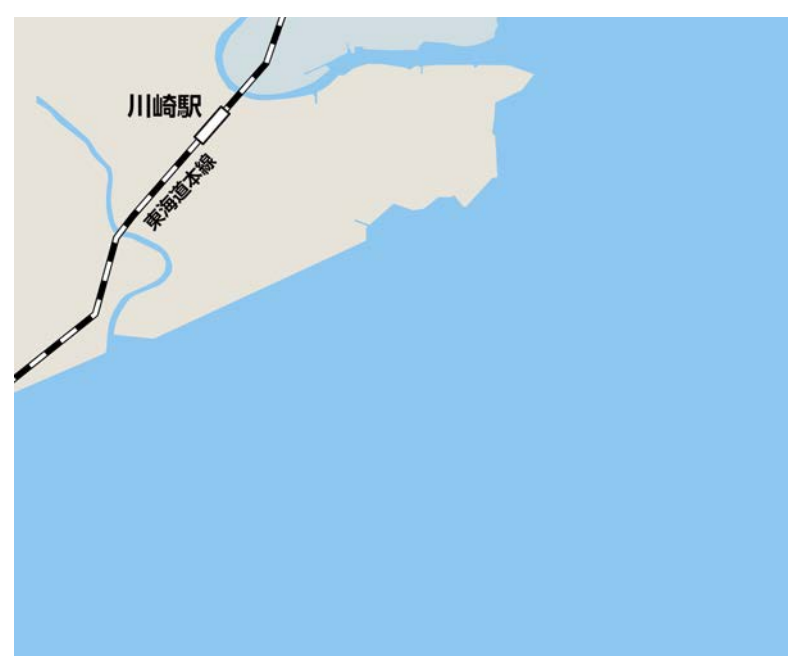
「京浜電気鉄道（今の京急）六郷橋の景」(川崎市市民ミュージアム所蔵)



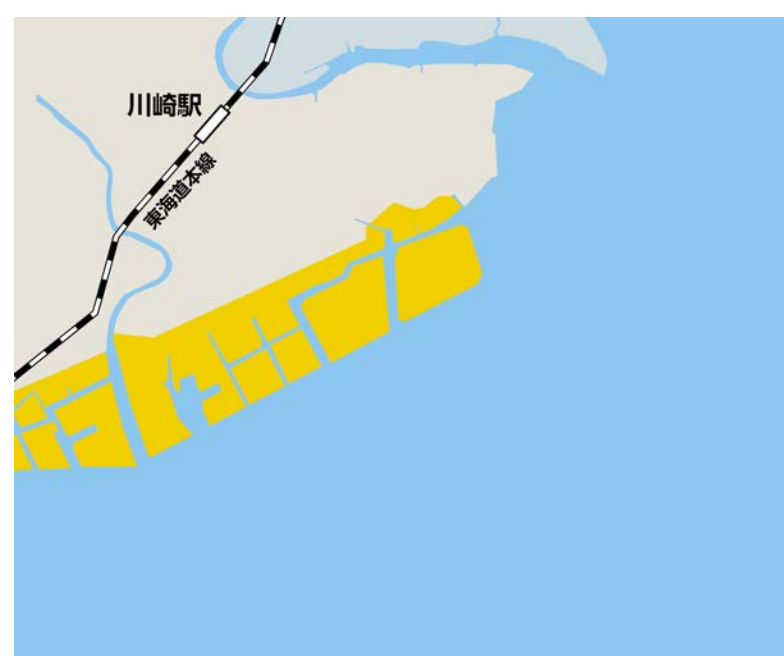
1934(昭和9)年に川崎市が工場を誘致するために作成したパンフレット「工場は川崎へ」(川崎市市民ミュージアム所蔵)

工場地帯の発展は埋立てから

横浜港の開港をきっかけに、横浜から江戸へ船による輸送が盛んになりました。しかし、当時の東京湾は波が荒く、干潟が多かったため、船が座礁することも多く危険な道のりでした。そこで、事業家である浅野総一郎は独力で埋立てを行い、東京と横浜を結ぶ運河にしました。その後、埋立ては広がり、大きな工場が立ち並ぶようになり、日本の工業生産を支えるもととなりました。



埋立て前の海岸線



1940年代以前



現在の海岸線

日本の文化になっている
初詣が、こんなふうに
広まったなんて知らなかった!



コラム

『初詣』が広まったのは鉄道会社の戦略!?

1872年に日本初の鉄道が政府により開通すると、京浜急行電鉄の創業者・立川勇次郎は六郷橋から大師を結ぶ路線を開業しました。立川は利用客を増やそうと戦略を練り、「初詣は川崎大師」と大々的に宣伝すると、この作戦が大当たり。こうして初詣は日本に定着していったとの説があります。



「京浜電気鉄道（今の京急）六郷橋の景」(川崎市市民ミュージアム所蔵)

川崎市の誕生

1924年に川崎町と御幸村、大師町が合併して当時の人口約5万人の川崎市が誕生しました。戦後、川崎市は目ざましい発展を遂げ、その後の高度経済成長期をリードする役割を果たし、日本の産業の発展に大きく貢献しました。経済の発展による景気の拡大は、市民の暮らしも変えていきます。川崎駅周辺には多くの映画館が立ち並ぶなど、まちはたくさんの人々でにぎわいました。



川崎市市民ミュージアム所蔵



川崎駅の風景（さいか屋から）

近代化していく日本

戦後、およそ20年にわたって、日本の経済は高い伸び率で上昇し続ける高度経済成長期をむかえました。特に鉄鋼などの重化学工業が発展し、工場は次々と施設を拡張しました。人々のライフスタイルも変わり始め、テレビ、洗濯機、冷蔵庫の「三種の神器」といわれた電化製品が家庭に急速に広まっていきました。1964年に東京でオリンピックを開くことが決まると、さまざまな整備が急ピッチで進められました。上下水道の整備、首都高速道路の建設、そして東海道新幹線の開通です。



東京オリンピックで聖火をともし当時の市長

変化する人々の暮らし

日本が世界有数の工業国に発展するとともに、人々の生活は豊かになっていきました。多くの人々が懸命に働いて、高度経済成長期を支えました。

昭和初期の暮らし



高度経済成長期の暮らし



四日市公害と環境未来館提供

みんなががんばって働いたことで、暮らしが豊かになってきたんだね。



公害のあしあと

川崎に工場が増え、人々の生活が豊かになる一方で少しずつその弊害が出始めてきました。工場から出る煙や排水が原因で街路樹などが枯れ、梨畑も少なくなりました。魚や海苔への被害も増えはじめ、埋立てが進むにつれて、海苔の養殖の姿も消えていきました。



「工場とノリ作り」



川崎市市民ミュージアム所蔵

海水浴場の背後に工場が広がっている「扇島海水浴場」